

琉球大学学術リポジトリ

[抄録] ジャマイカにおけるパンゴラグラスとサトウキビの輪作

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東, 清二 (抄録) メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015292

ジャマイカにおけるパンゴラグラスと
サトウキビの輪作

(T. Chinloy and B. M. Hogg——The
Sugar manufacturer's association Ltd,
Jamaica, Proceedings of ISSCT 13th
Congress, Taiwan : 636~642)

ジャマイカでは1956年にサトウキビの凶作が起った。それは連作がもたらした土壤微生物の増加による根群の障害が主な原因かと考えられた。そこで多年にわたって行なってきた輪作体形についてその利点を論じた。

試験は連作区、1年パンゴラグラス区、2年パンゴラ区、3年パンゴラ区の4主処理で、各区は品種3、N肥料2の6組合せに分画された96プロットの4回反覆とした。

その結果輪作は各条件下で有利であることを示した。

すなわちサトウキビの根群はパンゴラグラスの期間が長いほどよく発達し、生育は促進され、蔗茎および糖の収量が増加した。収量の増加に貢献する重要な要素は根を害する生物が減少するためであった。パンゴラグラスによる有機物の増加は僅かであるが、重要な役割を演じているかも知れない。それ自身の利点とは別に土壤中の水分が少ない時に水分保持力を高めることは十分考えられることである。他の物理的・化学的分析を行ったがその影響は認められなかった。pHと置換性石灰は1年パンゴラ区において低く、2年パンゴラ区においてやや上昇し栽培前の状態に戻り、それから上昇を続けて3年パンゴラ区では非常に高くなった。そのことは興味ある現象であり、注目すべきことである。

(抄録 東 清 二)